

われわれはどういう世界に生きているのか？

——この異常な世界の背後に見えてくる暗黒集団

What Kind of the World Are We Living in? : The Dark Group Detected Behind This Disturbing World of Ours

●京都大学名誉教授

渡辺 久義 *Hisayoshi Watanabe*

【梗概】 今日、われわれは異常な、ひと言でいえば気色の悪い世界に生きている。新聞やテレビを見ている限り、それがどこから来るものかわからない。しかしインターネットのような統制や支配が難しいメディアが発達することによって、われわれは実態に迫る新たな可能性を手に入れた。謎を解こうと点と点をつないでいくと、世界支配を目論む、ある暗黒集団が浮かび上がってくる。キリスト教的世界観では、善なる神と、それに反逆する悪魔（随天使ルシファー）が存在し、墮落によって悪の勢力が世界を支配するようになったと見る。聖書は時が来れば「毒麦と良い麦」の区別が鮮明になると予言したが、その予言は現実のものとなっているかのようなのである。その毒麦の極限にこの集団があると考えると、すべて謎が解けていくように思える。本論の究極の主旨は、結論に述べた愛による戦いという超越的な精神によるしか、現在の世界危機を乗り切る方法はないということである。

ファシズム

私がここで論じようとするのは、もし私が公職にあれば、犯罪ではないにしても、非常に不適切なことと思われるだろう。しかし私から見れば、その見方は逆にしなければならない。どういうことか？ Information Clearing House というインターネット・サイトに投稿された論文「オーウェルよ、フランスへようこそ——再び!」の冒頭を引用しよう——

フランスは現在、リビアでの“秘密の戦争”のさ中にある——国際法を堂々と無視して。しかしこの犯罪行為を（ル・モンド紙のように）報道するのは犯罪である！ フランスが陥ったオーウェルの二重思考（double-think）の世界へようこそ！

ここにはいろいろな問題が含まれている。まず「オーウェルの二重思考の世界」とは、George Orwell が 1940 年代に書いた、現在の世界情勢を予言したかのような小説『1984』を指している。これは世界の現状を知りたいければ『1984』を読めと、よく言われる重要な作品である。ただし、それはインターネットの世界での話であって、新聞やテレビでそれを言う人はまずいないと思う。そのこと自体が「二重思考の世界」である。

現在、われわれの生きている世界は、いわゆる主流メディア（表）の世界と、インターネット（裏）の世界の2つに分裂していると言ってよい。表向きはタブーになっていること（知ってはならないこと）が多すぎる。われわれが多少とも批判的に新聞や

■わたなべ・ひさよし

1934年岐阜県生まれ。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科修士課程（英米文学）修了。京都大学総合人間学部教授、現在、京都大学名誉教授、創造デザイン学会代表。主な著書に、『ヘンリー・ジェームズの言語』『イエイツ』『意識の再編—宗教・科学・芸術の統一理論を求めて』『善く生きる—「人間学」の基礎と倫理の根拠』、共著『ダーウィニズム150年の偽装—唯物論文化の崩壊とID科学革命』、共訳『意味に満ちた宇宙』『ザ・シンクロシティ・キー』、監訳『進化のアイコン』ほか。

テレビを見ている限り、納得できないこと、不可解なことだらけのはずである——例えば、「イスラム国」「9.11」など。そのこと自体をファシズムとは言えないが、われわれが「気持ちの悪い」世界に住んでいることは確かである。

主流メディア（企業メディア）は絶対に口にしないが、ネット上では当たり前のように使われるキーワードやフレーズが、かなりある。いくつか思い出すだけでも、New World Order (NWO), False Flag Operation (ニセ旗作戦²), グローバル・エリート、影の政府、イルミナティ (Illuminati), Depopulation (人口削減、または Georgia Guidestones), Chemtrail³, 陰謀論 (Conspiracy Theory), また inside job (自作自演、ニセ旗) としての 9.11⁴, 米-NATO の作ったテロ組織⁵, など（一々項目を説明はできない。末尾の注によって、われわれのブログの多数の関連文献を調べていただくか、ネット検索していただきたい）。その他、あげればきりが無いが、これらがすべて繋がって一つの像を結ぶとすれば、それは一つの重要な事実を指していることになるだろう。「われわれがどういふ世界に生きているのか」は、現在のところインターネット情報（とわずかの出版物）によるしか知るすべがない。しかし同時に、それは知ってはならないことであり、論ずるのは犯罪ではないにしても“公序良俗”に反するかのようだ。この異様な空気は誰でも感じているのではなからうか。

われわれが異常な世界に住んでいることを、私が初めて実感したのは数年前、YouTube、「FEMA の棺桶」「FEMA の強制収容所」といわれるものが、アメリカで大量に用意されていることを知ったときである。これは誰が見ても尋常ではない。近く何かが起こること、それに備えて強権発動が予定されていることを、それは示すだろう（これもメディアではタブー、ネット上では常識になっている）。

これはアメリカの話だから関心がないと言えるかもしれない。しかし（露・中を除く）世界的現象として、われわれの頭の上に、時には碁盤の目のようにかかる（そして、日米の省庁のどこに訊ねてもわからない）ケムトレール——これに人々が無関心なのは不気味である。その組成⁶（毒性物質）よりむしろ、ネット世界以外で、全く話題にならないことの方が気

味が悪い（これについては GeoengineeringWatch.com をお勧めする）。何を恐れているのか？ それは『1984』で言えば、見えないがいつもこちらを監視している支配者「ビッグ・ブラザー」であろう。

9.11 テロについても同様で、この現在の世界的混乱の元凶である“裸の王様”が、裸であるとは言えないことになっている。私はそのことを世界日報に書いたことがある⁷。私の考えとしてではなく、引用によってである。英首相キャメロンが国連で、9.11の政府公式説明を疑ったり否定したりする者は処罰すべきだと言った。これを聞いたある人があきれ返り、インターネットに公開質問状を投稿し、こんなことから見ても不自然な、どの方面の専門家が見ても明らかに疑問だとする出来事について、よくそんなことが言えたものだ、質問に答えてほしいと言った⁸。私はこれは、キャメロンのファシズム宣言だと書いた。また、わが国には日米安保条約があるからといって、アメリカについて本当のことを、知ってはならないことにはならないと書いた。これについてこの新聞が、非常に神経質になっていることがよくわかる。しかし、この歴然たる大ウソ——疑う人は 2016/3/13 記事だけでも読んでほしい——を、いつまでも押し通すことはできないではないか。これは、われわれが真実を把握し警戒していなければ、世界を滅ぼすかもしれないウソである。

もっと微妙で、人々が容易に気づかないことがある。私は、ダーウィン進化論という、どう見ても有効期限の切れた理論に代わる Intelligent Design (ID) という理論を、日本に紹介した。これは、生命や意識を唯物論で説明することはできない、宇宙の根源に何らかの Intelligence を想定しなければならぬという、最近ますます支持者の増えてきた理論で、ダーウィン理論に証拠がないのに対し、これは証拠によって固めた理論である⁹。

その頃（2009年）、『種の起源』の出版150年記念の行事があり、日本のある大新聞が2面にわたる大きなダーウィン賛美の記事を組んだが、IDについては一言も触れなかった。そしてこの同じ新聞が、同じころ、「ローマ・クラブ」(Club of Rome) という怪しげな組織を紹介し、今年の正月には（おそらく時代の指導者として）ビル・ゲイツを一面に掲げた（昨年ヘンリー・キッシンジャー!）。そこで三題噺

のように、この3つをつないでみてほしい。出てくる共通項は先にあげたキーワードの一つ、“人口削減”または優生学 (eugenics)、または適者生存である。どうしてもダーウィン進化論を(真理のためでなく)自分のために必要としていて、かつメディアを牛耳ることのできる者たちがいる、と考えざるをえない。つい最近まで、有名大学の研究者が、ダーウィン進化論の証拠になりそうな、新しい事実を発見すると、さっそく新聞とNHKテレビが飛びついて、ニュースとしてこれを報道したものである。この頃それがなくなった。おそらく、このような不毛な前提の研究をする学者がいなくなったのだろう。私は、学界-メディア共同体に聞いてみたい、「あれはどうなったのですか?」と。これはまた学問の世界を、唯物論という牢につないでおくためでもある。後に述べるが、彼らは信仰者であって唯物論者などではない。ファシズムというものは、目に見える警察としてだけでなく、ひそかに忍び寄るものでもある。Illuminati-controlled main-stream sciences (イルミナティにコントロールされた主流科学) ——これはあるETの語った貴重な警告の言葉である (ETを信じないという人は信じなくてよい。)

聖書の「毒麦と良い麦」の喩え

マタイによる福音書 13 章に、「毒麦と良い麦」の喩えとして知られる有名な話が出てくる。私は終末と言われるこの時期の説明をするのに、必ずこの話をする。ある農園の僕が「夜のうちに敵がやってきて、良い麦の畑に毒麦の種をまいていきました、抜きましようか」と主人に言った。主人は「それはほっておけばよい、若い青草のうちは区別がつかぬからだ。しかし収穫の時期になれば、はっきり見分けがつくようになる。その時に毒麦だけ刈り取って燃やせばよい」と言った。

これが予言であるか否かはどうでもよい。しかし、これがわれわれの生きているこの時代のことを象徴的に指したものと考えると、これ以上見事な喩えはないと言うほかはない。われわれはほんの数十年前まで、何が善で、何が悪かわからなかった。さまざまな“イデオロギー”の間で迷った。たいていの人々が、共産主義が正しいと思ったことがあるだろう。しかし

それが間違いらしいということになっても、では何が正しいのか自信は持てなかった。そもそも善悪の区別があるのかと思った。それがここまで引きずってきた、われわれの時代の曖昧な空気だった。

しかしその一方で、いわば陰に隠れて、ここ何年かの間に、良い麦と悪い麦の区別がはっきりつくようになった。それは時間の進行とともに、ますます客観的に歴然たるものになっていった。ある宗教家が言ったように、隠されたもの、長年の秘密であったものが、すべて暴かれねばならない時代になったからである。いまわれわれは、純粋な「悪」と言えるものをつかみ出すことができる。この論文の目的は、その悪の在りかを突き止めて、その上でわれわれがどう行動すべきかを考えることである。

そのように言うと、多くの人々は疑問をもち、純粋な悪などというものがあるはずがない、どんな悪人にも良いところがあり、どんな善人にも悪いところがある、と言うだろう。われわれの知る日常の世界ではそうだ。しかし「神」に逆らう純粋に「悪なる者」は存在する。「夜のうちに敵がやってきて毒麦をまく」の「敵」は、英語では adversary (逆らう者) であり、ひそかに神のまいた良い麦を、完全に駆逐しようと企む神の敵対者「サタン」のことである。

アメリカ帝国、イルミナティ、NWO

インターネットなどというものは、ウソでも何でも自由に書けるのだから、あてにならないと言う人がいる。それはサイトの信用性による。ここで私が最もよく利用し、「創造デザイン学会」サイト www.dcsociety.org に翻訳紹介している、いくつかの英語のサイトを紹介しておこう。Information Clearing House, Global Research, Divine Cosmos, Consortiumnews, RT (Russia Today), Truthout など。これらは信用厚いジャーナリスト John Pilger の推奨するものとかかなり重なっている。

こうしたウェブサイトにも共有されているキーワードは、先に述べた通りだが、アメリカ帝国 (American Empire) をそこに加えてもよい。これらのサイトに投稿する人々の誰一人として、アメリカが民主主義の自由の国だという人はいない。アメリカを deep state (深層国家) と呼ぶ人もいて、単純な表向きだけの

民主国家ではない。米政府を背後から動かす、米政府を使って世界を征服しようとする隠れたグループが存在する。このグループに国籍の意識はない。だから最も一般的に「グローバル・エリート」と呼ばれる。ごく少数なので「寡頭政治家(Oligarchs)」と呼ぶ人もいる。われわれの翻訳した『ザ・シンクロシティ・キー』の著者David Wilcockは、一貫して「陰謀団」(the Cabal)と呼ぶが、「地球の敵」(Global Adversary)とも呼んでいる。しかし彼ら自身は、自分たちの秘密結社を「イルミナティ」(Illuminati = the Enlightened, 光を得た者たち)と称している。この言葉はもちろん、メディアではタブー中のタブーである。

断っておくが、こういっただけを明らかにするのは、スキャンダルを楽しむためでも、憎しみを煽るためでもない。帝国主義という観点を取らなければ、今、アメリカが世界中で行っている犯罪行為が理解できないからである。彼らに支配されたわれわれのメディアは、あたかもわれわれの王室の犯罪に触れ、不敬なことであるかのように、これを隠すか歪めて報道している。これはわれわれの社会の深刻な問題である。

彼らに国籍の意識はなく、対立するのは、彼ら少数の国際的エリートと、その他すべての人々である。だから自国の市民でも、保護の対象どころか、敵として奴隷化するか殺すべき者となりうる。米ジョージア州に、彼らの建てたとされるGeorgia Guidestonesと呼ばれる、ストーンヘンジを真似たような巨大な石碑があり、そこには「世界の人口は5億以下が望ましい」と書かれている。人口削減が彼らの最優先目標の一つである。

彼らは、この地球は最初から自分たちの所有物だと考えており、ある意味で、確かにわれわれの畏れ多い王室である。「ビルダーバーグ会議」(Bilderburg Conference)と呼ばれる(われわれの知ってはならない)世界の支配者グループの中には、実際にヨーロッパの王族も含まれている。彼らは究極的には、ロシアも中国も支配下に置く、一つの帝国を目指しているから、国際法も道徳法も超越している。冒頭に引用した論文で、フランスが「国際法を堂々と無視して」リビアで秘密の戦争をしている、と言っているが、これはフランスが米帝国の同盟国だから許されるの

である。フランスでは、この国家的犯罪をばらす者が犯罪者になっている。

そこで、もう一つのわかり易いキーワードはAmerican Exceptionalism(アメリカ例外主義)というものだ。これは、アメリカだけは特別で、何をやっても許されるという、アメリカに根付いている思想である。昨年(2015年)9月のニューヨークの国連総会で、オバマ大統領の行った演説は、この傲慢をむき出しにした内容だった。アメリカに従う者だけが許される、アメリカがいなければ平和も秩序もない——このあまりにも現実と正反対の演説に、会場は一瞬、静まり返ったと報道された。これに対してロシアのプーチン大統領だけが、冷静に毅然としてこれを批判した。しかし日本を含めた米同盟国は、アメリカの宣伝に乗ってプーチンを小ばかにしている。

独立国家の主権の侵害ということが、アメリカ-NATOの当然の権利であるように、われわれも錯覚している。だからオバマの傲慢きわまるスピーチも、空気のように通過して話題にもならない。しかし「帝国」側から見れば、そんなことは当たり前である。なぜならこの地球は、人間も資源も含めて、本来、彼らが所有し支配すべきものだからである。今はまだ、その所有と支配の計画が完成していないというだけである。この彼らによる世界支配計画が遂に実現した状態のことを、New World Order (NWO)という。この言葉を1991年、初めて米議会で口にしたのは、父ブッシュ大統領だった。それに続いて何人かの米主要政治家がこの言葉を連発した。しかしその後、政治家の誰もこれを口にしなくなった。これが途方もなく恐ろしい謀略を意味する言葉だと、民衆が気づいたからである(実は、この3文字は、米1ドル紙幣の裏にラテン語で書かれているのだが、ここでは立ち入らない)。

驚くべきイルミナティの支配力・浸透力

先に述べたように、秘密結社の秘密性が、だんだん保てなくなってきたために(秘密を暴いて暗殺される人もいるが、もうそれもむつかしくなった)、最近では「イルミナティ」の存在を知っている人も多くなった。しかし「イルミナティというものがあるようだ」

と、よその世界のように言うのは間違っている。なぜなら、われわれは、彼らの創った世界に生きてると言っただけではないからだ。近代史も、彼らが中心にいて動かしたと言える。彼らのピラミッド支配構造は有名だから、その絵を見た人も多だろう。構成員は、階層を上がるごとに全体像をより明瞭に把握し、より大きな権力をもち、階層を下がるごとに、より断片的になって全体は見えにくくなる。彼らはこの組織によって、社会のあらゆる分野——政治、軍事、金融、法曹、大企業、メディア、地方行政など——に人材を送り込み、ほとんど確実に主要ポストにつかせると言われる。そして彼らが支配するのは、国連を初めとして宗教界、特にわれわれに影響を及ぼすのは、メディア、学界、教育界などである。学術団体などは、純粋な動機をもつ学者集団と思いがちだが、アメリカで最初にできた歴史、経済、化学、心理学の各学会は、イルミナティの指導によるものと言われ¹⁰、アインシュタインも、彼らがいなければ出てこられなかったと言う人もいる。UFO や ET を笑いのものにする雰囲気を作ったのも、おそらく彼らである。彼ら自身はそういったものの専門家——というより一緒に生活している。

われわれがアメリカに負けて、その vassal state (従僕国) となったのも、彼らの着々と進行する、より大きな NWO 計画の成功の一コマであろう (F.D. ルーズベルト大統領は、日本軍の真珠湾攻撃を見抜いていながら、わざと自国の将兵を撤退させず、殺した)。アメリカ帝国は目的のためには手段を選ばない。9.11 テロというウソを根拠にして、イラクの WMD (大量破壊兵器) というウソを口実に始まった、彼らの中東の戦争は、やはり“テロとの戦い”というウソをスローガンにして行われている。アルカーイダや「イスラム国」テロリストは、もともと彼ら (CIA) が訓練し、武装させ、資金援助して作ったものであって、一般に CIA の assets (資産) と言われる。だからこそ彼らは、ロシアがテロリスト退治を始めて慌てるまで、“人類共通の敵”テロリストをほとんど攻撃しなかった¹¹。

イルミナティ研究がなぜ必要か？ ——ルシファー信仰者

なぜ、こういう残忍な戦争がいつまでも続くのか？ 今、中東などで起こっている戦争は、国家を代表する、武器をもった者同士が戦って決着をつける戦争ではない。本質は無差別殺戮である。敵も味方もないように見える。だいたい前、NHK ニュースで、「どうも子供を狙っているようです」とひと言だけいったことがある。子供を狙うようなテロリズム (恐怖で威圧すること) がどうして必要なのだろうか？ 全く報道されないイエメンのような所で、どんな恐ろしいことが起こっているのだろうか？ どうして残忍な傭兵を使って市民を殺させたり、互いに殺し合いをさせたりするのか？ 病院攻撃などは意図しない巻き添え (collateral damage) であるかのように言うが、そうではないようだ。戦争だから汚いのが当たり前とは言えない (ティム・アンダーソン『シリアへの汚い戦争』参照¹²)。「帝国」は軍-産複合企業が大切な資金源だから、戦争を終わらせることはできないのかもしれない。戦争の泥沼化が必要なのであろう。しかし、それだけで説明はできない。「いったいなぜ！」という疑問は消え去らない。ここから考えざるをえないのは、純粋な「邪悪」の概念、道徳の徳目すべてを嘲笑う「悪魔」の概念である。そう考えてイルミナティというものを追及していくと、すべてが腑に落ちる。

イルミナティ研究ですぐれたものがいくつかあるが、われわれのサイトでごく最近、翻訳紹介した「イルミナティ理解のために」を読んでみていただきたい。そこでこう言っている——

われわれはイルミナティの信仰を調べることによって、彼らの精神構造と、彼らを打ち負かす方法を知ることができる。まず、彼らは無神論者ではない。彼らの神はルシファーだが、彼らはルシファーを悪とは見ていない。彼らにとってルシファーとは、「光」をもたらす者、すべての知識と知恵と力の源泉である。彼らの哲学の目標は、ルシファーの「光」を完全に取り込むことである。・・・

「どうして同じ普通人間なのに、彼らのように考えることができるのだろうか？」と問う人々がい

る。しかし彼らは普通の人間ではない。そもそも彼らは人間なのかと問う人さえいる。彼らの世界観全体が、われわれのものとは完全に異なっている。彼らは狂人でも、常軌を逸しているのでもない。実は彼らは、平均的な人間より、はるかに合理性を重んじている。・・・

イルミナティの高度な知性は、無知な大衆が夢中になるつまらない、スポーツ、ポップ音楽、メロドラマ、ゲーム、ハリウッド・ゴシップなどによって、動かされたり楽しまされたりすることはない。彼らのスポーツや娯楽は、“本物の”戦争ゲームであって、ビデオの戦争ゲームではない。彼らは本物の軍隊を使い、本物の人間をふっ飛ばして楽しむ。世界は彼らの“チェス盤”で、彼らは軍隊をおもちゃのように動かし、兵器をテストする。次の手を計算し、信じやすい大衆を騙したり、もてあそんだりするのが、彼らの大好きなスポーツである¹³。

役割としての神への反逆

ここで強調されている彼らの知性の高さ、それに「本物の戦争ゲーム」という言い方に注目すべきである。これは決してわれわれがいきり立つようなことではない。これを語っている人の正体はわからないが（危険だから名を明かさない）、これとは別のHiddenHandという偽名の“イルミナティ・インサイダー”の言っていることを、併せ読めば一つの推測が成り立つ。彼はインタビューに答えてこう言っている――

記者:われわれは本当に政府によって、家畜と考えられ、そのようなものとして取引されているのですか？

HH:政府によっては、一般的に言って、その通りです。人々は“抵当物件”と考えられています。ゲームのプランに応じて、チェス盤の上をあちこち動かされるポーンです。「家族」（イルミナティ家系のこと）はどうかというと、一般の信念とは逆に、われわれはあなた方に、直接どんな害をも与えるつもりはないのです。神による運命を、実行し展開するという問題があるだけです。そして

われわれはこのゲームで、われわれの役を演じなければならぬのです——創造者によって決められた通りに。多くの点において、実は、あなた方がやがて来る「収穫」(Harvest¹⁴、マタイによる福音書13:30)に用意されているということは、われわれ自身のためなのです。あなた方が望むようなやり方で、用意されてはいないかもしれませんが。・・・どうすれば自由になれるかというのですか？自分がどこにいるかを突き止めることによって、そして、なぜここにいるかの理解に達することによってです。・・・

記者:なるほど。ではあなた方「家族」と仲間のエリートたちは、われわれと同じように、この地上に閉じ込められているということですか？しかし、ではなぜ、この奴隷化する勢力を積極的に増強し、援助するのですか？

HH:理由は、それが、われわれがこのゲームにおいて、演ずることを約束した役割だからです。このゲームに“勝つ”ためには（あるいはもっと正確に言えば、成功するためには）、われわれは可能な限り「ネガティブな極性」を持たねばなりません。極端な形の「自己への奉仕」です。暴力、戦争、憎しみ、貪欲、支配、奴隷化、民族抹殺、拷問、道徳的墮落、売春、麻薬、これらすべてと、もっと多くのことが、われわれの目的に奉仕しているのです——このゲームでは、われわれとあなた方の、このゲームの違いは、われわれは自分が“演じている”ことを知っていることです¹⁵。・・・

このHiddenHandとはどういう人だろう？イルミナティ社会最高の哲学者ではなからうか？彼は、明らかに「毒麦と良い麦」の喩えを、現実に起こることと理解している。「収穫」という言葉はそこで使われ、毒麦は束にして焼き捨てられ、良い麦は刈り取って倉に納められる。彼も同じように、自分たちの行為をゲームとして捉え、彼らの行う極端な形の「自己への奉仕」、極端な形の悪は、神によって定められた運命であり、彼らに対立するわれわれに何かを気づかせようとする、意味をもったものだと言っている。よく考えてみれば、彼らのNew World Order

が完全な形で実現したとして——ルシファーに仕える邪悪な者と奴隷だけが生き残ったとして——世界がよくなるはずはない。彼らは、人間のなすべき「他者への奉仕」の対極にある「自己への奉仕」を、極端な形で演じて見せることによって、われわれがどんなに不幸になるかを教えようとしているのである。彼らは、われわれに負かされることによって救われる。われわれは彼らに勝たねばならないが、それは武器によってでなく、復讐によってでなく、愛をもつて彼らに立ち向かうことによってである。われわれは気づかねばならない。彼らは「気づき」を促しているのである。

イルミナティ離脱者の発する SOS

現在、インターネット上には、イルミナティ離脱者による告白(告発)のビデオやテキストが豊富に公開されている。これまで、この集団を外から見て説明したものはあったが、命がけで逃げ出した離脱者たちによる証言は、初めてでショックを与えるものだった。これによって、彼らの内部事情に触れることができるようになったが、前にも言ったように、こんな異常者たちの世界はわれわれに関係がないと言うのは、間違っている。これによってわれわれは、われわれの目指す善や愛の世界を裏返した人間存在の深い闇に触れることができただけでなく(彼らは子供の生贄儀式もやっている¹⁶⁾、単なる比喩か象徴だと思っていたことが現実だったことがわかる。例えば、ルシファー(サタン)が実在すること、魂を悪魔に売り渡すということが現実の話だとわかる(彼らはマインド・コントロールは使うが、精神異常者ではない)。

離脱者の中でもスヴァーリ(Svali, 偽名)という聡明な女性の証言が、知的で詳しく、特に注目に値するように思われる。その一部を翻訳してwww.dcsociety.org に載せているので、ぜひご覧いただきたい¹⁷。例えば、彼らの世界の子供教育の話は、あまりにも恐ろしく悲惨で、ここに繰り返すこともできない。それは一言でいえば、人間性破壊の教育である。これは明らかに、神の創った自然を故意に破壊するもの、サイコパス(psychopath)と呼ばれる人間を人工的に作り出すもので、平然と人

を殺すことができないような弱虫は淘汰される。当然、倫理道徳も見事に転倒される。そのすさまじさは、特に、性に対する態度に表れている。彼らの間では、incest(近親相姦)が当たり前のようであり、pedophilia(小児性愛)がごく普通に、組織的に行われている。離脱者のほとんどがそれを証言している。これはかなり広範囲な風習で、米英の上流社会やハリウッドなどでは、pedophiliaはほとんどcultureになっていると言われる。犯罪文化。それはひどすぎる、信じられない、という人があるかもしれないが、神の創った世界を壊すには、これほどよい方法はないかもしれない——そしてそれは半ば成功している。

最後に

神の創った本来の世界を取り戻そうとする宗教運動がある。私がここで分析を試みたのは、その逆方向の運動をする人々、神の創った世界を破壊しようとする集団である。彼らが刈り取られ、束にして焼き捨てられる運命にあるのは、その生命であった秘密性が次々に崩れ、離脱者がますます増えていく現状から、確かである。彼らは内部の実態を暴露し、「もう耐えられない、われわれを助けてくれ」と必死に訴えている。しかし、スヴァーリは同時に、自分は命を賭けて脱出し、これだけ情報を提供し、悲惨な実態を明らかにしているのに、一般社会はあまり関心がないようだ、諦めたように皮肉を言っている。

私は、善悪の最終決戦としてのこの混乱や殺戮は、われわれの意識改革を通じて世界が回復に向かうまでに、あとしばらくは続くものと考え。われわれのなすべきことは武器を取って戦うことでなく、この対決の摂理的構図、その意味あるいは意図に気づくことである。HiddenHandの言葉を紹介したEliot Estepがこう言っている。このすぐれた洞察の言葉を借りて私の結論としたい——

(HHの言葉は)権力エリートについての私の見方に、永久的な影響を与え、私は彼らのものの見方をより多く学ぶことによって、現実のより高い理解が得られたように感じている。私はこれによって、実はエリートたちを許すことができた。なぜ

なら、より深いレベルでは、われわれ全部がつながっていて、「一者」の一部であり、実はすべてが同じチームのためにプレーしているからである。長年、私が心の中に憎しみと恨みを抱き続けていたことは、甚だしい重荷であったが、今、それを解放する選択をして、私は喜びを感じている。これは地上的観点からは理解しがたいことだが、われわれが自分の内なる自己を開発すればするほど、われわれがどこから来て、どのようにわれわれすべてが繋がっているかが、思い出せるようになる¹⁸。

(2016年4月11日)

注：

- 1) 創造デザイン学会 www.dcsociety.org (Post-2012 World) 2016/3/3 記事 (以下、学会記事)
- 2) 学会記事, 2016/4/6, 2015/1/28「ニセ旗作戦とは何か？」
- 3) 学会記事, 2014/7/16, 2014/1/30, 2014/1/24, 2014/1/20, 2013/7/1, 2013/6/27, 2013/6/26.
- 4) 学会記事, 2016/3/13, 2015/9/22, 2015/3/18, 2014/9/18「9・11リーダー(序文)」
- 5) 学会記事, 2016/3/31, 2015/6/8, 2015/6/5, 2015/3/3, 2014/9/30.
- 6) 学会記事, 2014/1/24.
- 7) 世界日報, 2015/6/1, 「虚偽で行われたイラク攻撃」; 学会記事 2015/5/31「虚偽の上に立って世界情勢は見えてこない」
- 8) 学会記事, 2014/11/5, 2016/3/13.
- 9) 学会記事, 2015/3/29「超自然がなければ自然は理解できない」の、末尾にあげた3項目に、ID理論の証拠が要約されている
- 10) 学会記事, 2015/5/21「世界を本当に支配しているのは誰か？」 p.8.
- 11) 学会記事, 2016/2/26「御用新聞も隠せなくなった事実」参照。
- 12) 学会記事, 2016/3/16.
- 13.) 学会記事, 2016/2/13「イルミナティ理解のために」
- 14) この比喩に現れる Harvest(収穫)という言葉は、HHと同じく、David Wilcockも、彼の依拠する「一者の法」も、転換期に起こる Ascensionの出来事と捉えている。

- 15) 学会記事 2016/1/6「イルミナティ・インサイダーたちの明かす、エリート集団の秘密のからくり(2の2)」 pp.2-3.
- 16) 学会記事, 2016/1/24.
- 17) 学会記事, 2016/1/6 ~ 2016/1/24, 2013/2/25
- 18) 学会記事, 2016/1/6, p.2.